（独立行政法人教職員支援機構委嘱事業）

教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業

実 施 報 告 書

プログラム名	教職大学院「地域科目」と「ちゃぶ台ミドルリーダー養成プログラム」の融合・相乗による課題解決力向上プログラム
プログラムの特徴	本プログラムは、課題解決力や組織的協働力等を備えたミドルリーダー教員の育成を図るため、教職大学院カリキュラム（地域科目）と自主的・自発的教員研修事業を融合し、両者の相乗による実効性高い大学院カリキュラム・教員研修プログラムを開発（試行と提案）しようとしたものである。 本学と山口県教育委員会は、10年超の連携・協働の歩みの中で、本学や教職大学院が地域に果たす役割と地域貢献、山口県におけるミドルリーダー教員養成の意義と育成方途や両者の連携・協働による教員の養成・採用・研修の一体的取組と在り方等について、思いを共有してきた。 その中で、山口県教育委員会は、全国に先駆けて、教職課程を有する県内全大学と市町教育委員会や学校等からなる「山口県教員養成等検討協議会」を設置し、質の高い「学び続ける教員」の育成に取り組んできた。 本学は、「ちゃぶ台プログラム」の開発をとおして教員養成・研修事業の活性化を図るとともに、地域と共に歩む教職大学院をめざし、県や地域が抱える教育課題を扱う地域科目を開設し、地域に貢献できる人材育成に努めてきた。 そこで、本プログラムでは、教職大学院は、山口県教育委員会と連携し、ミドルリーダー養成プログラム「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course」を実施し、教員のミドルリーダーとしての資質能力を高めること、研修組織は教員経験3～15年目頃の現職教員並びに教職大学院生（現職教員・学部卒院生）で構成し、通年・積み上げ型の研修を行うこと、県内各地域の教育諸課題を反映した地域科目「山口県教育の現状と課題」を開設し、教職大学院科目の高度化を図ること、県内4箇所での巡回公開講座型研修の実施をとおして地域の教職員研修の活性化を図ることとし、その具体化を図ってきた。 本学と山口県教育委員会が連携・協働し開発したプログラムの実際を具体的に報告する。全国各地の大学や教育委員会による教員研修の活性化に寄与できれば幸甚である。

平成 30 年 3 月

機関名：山口大学　連携先：山口県教育委員会

プログラムの全体概要

大学と教育委員会が連携・協働し、養成段階から教職生活全体を通した学びを支援し、教員の資質能力の向上をとおして「学び続ける教員」を育成することが求められている。大学が有する知見を積極的に活用し、学校や教育委員会等と結びついた、現職研修プログラムの協働開発、教員個人や集団に対する支援体制の構築や教職ステージ各期に求められる資質能力の解明等に大きな期待が寄せられ、実践的研究の拡大、理論と実践の往還による教員の養成・採用・研修の一体的事業の活性化や教職員の意識改革等が求められる。

山口県は、教員の大量退職・採用に伴う熟練教員の減少、若手教員の増加が進み、県教育を支えてきた教員たちが積み重ねてきた教員文化や教育力の伝承が課題となっている。同時に、全国的な教員採用志願者数の伸び悩み、採用試験合格倍率の低迷等の中で、採用後も、教職キャリア全体を通じて、自らの「教員としての質」を高めていける教員の育成が喫緊の課題である。

若手教員は、学校が有する教育課題がますます高度化、多様化、複雑化する中で、学校活力の向上、知識技能の刷新や「学び続ける教員」としての成長が期待される。特に、今後の教員年齢構成の推移や、主任や校務推進役として活動する機会に恵まれにくくミドルリーダーとしての力量形成が遅れがちな現状等は、早い段階からリーダー的視点をもって取り組めるミドルリーダー候補教員の育成を強く求めている。

また、学校組織の健全な経営、実効的運営において、校長・教頭等管理職の高いマネジメント能力が問われることは論を俟たないが、同時に、学年、校務分掌や教科部会等を先導し「コーディネーター」や「アドバイザー」として機能するミドルリーダーの存在は極めて大きい。ミドルリーダーには、学校経営や組織運営に関する基礎知識や技能、組織内の連絡調整や他の教職員に対する指導助言等に関するスキルが求められ、学校マネジメントを意識し、人材育成の視点をもって集団統率や分掌運営に携わる力量形成を期待したい。大学と教育委員会は一層連携・協働し、現職研修プログラムの高度化を図るなかで、採用初期から計画的、組織的なミドルリーダー養成に取り組む必要がある。

そのような中、山口県教育委員会は、大学と教育委員会が一体となって養成・採用・研修の取組を推し進めるため、教職課程を有する県内全大学と県・市町教育委員会、学校等で構成される「山口県教員養成等検討協議会」を全国に先駆けて設置し、高い志、意欲や実践的指導力をもち、

自信と勇気をもって教壇に立ち続ける教員を育てる体制づくりや取組を進めている。まさに時宜を得た取組と言える。

そして、山口大学（教育学部・教育学研究科）は、山口県を中心とする地域の教員養成と研修を中核的に担う総合大学（教員養成学部・研究科）としての役割や意義を深く自覚し、教員養成に特化した学部改組、実践的指導力向上に資する教職カリキュラム改革や全学教職センター開設等を積極的に押し進めてきた。

加えて、昨年度開設された教職大学院（教育学研究科教職実践高度化専攻）は、山口県が有する教育課題に関する理論的・実践的力量を高め、学校現場で指導的役割を担い得る人材を養成することをめざし、山口県や地域における教育課題を扱う「地域科目」を開設している。

そこで、地域課題に焦点をあてた教職大学院科目と「ちゃぶ台方式」によるミドルリーダー養成講座を融合・相乗させ、課題解決力や組織的協働力等を向上させる高度の教員研修プログラムを開発・提案することとし、プログラム名を「教職大学院「地域科目」と「ちゃぶ台ミドルリーダー養成プログラム」の融合・相乗による課題解決力向上プログラム」としたものである。

Ⅱ　開発の目的・方法・組織

１．開発に対する本学の思い（背景や問題意識）

(1)本学、教職大学院（教職実践高度化専攻）の役割と地域貢献への思い

山口大学は、地域の教員養成・教員研修を中核的に担う総合大学としての役割を自覚し、山口県教員の養成と資質能力の向上、養成・研修の一体化事業を通して「学び続ける教師」の育成に取り組んできた。

昨年（平成 28 年）4 月には待望の教職大学院を開設し、学校現場の課題解決プロジェクト研究をとおして、学校及び地域の教育諸課題に関する理論的・実践的力量を高め、学校現場における指導的役割を担い得る人材を養成している。教職大学院は、入学前の職務経験、学習歴や人材育成像をふまえ、現職教員院生が学ぶ「学校経営コース」と学部卒院生が学ぶ「教育実践開発コース」で編制し、院生は学校現場を「学びの原風景」とし、県・市町域教育課題や地域課題とつなぎながら実践研究を行っている。

その実践研究の充実には、地域の教育課題や県・市町特有の地域課題の理解が必要である。同時に、「山口大学に教職大学院ができたことにより、地域の教育が活性化し、教育諸課題の解決に向けた取組が大きく前進したと評価されることが教職大学院の開設理由であり、存在価値」という地域貢献への思いもあり、各科目や領域を横断的・総合的に取り扱い、山口県や市町における教育諸課題を扱う「地域科目（山口県教育の現状と課題）」を開講している。しかし、各地域での個別具体的な実践研究は、個人の中に収斂しやすく汎用性のある実践知・理論知として資質能力の向上に繋がりにくい。

そこで、本学が教員養成・研修方式して確立してきた「ちゃぶ台方式」を導入し、理論と実践の往還、省察的学びの共有と蓄積、連帯意識に基づく教職の仲間づくりで成果等を挙げる「ちゃぶ台次世代コーホート」等実践的な現職教員研修プログラムや研修行事等との融合や相乗が図ることが重要と考え、本プログラムを開発することとした。

(2)山口県におけるミドルリーダー、中堅教員養成への思い

山口県は、教員の大量退職・新規採用教員の増加期にあり、今後 10 年間に半数近くの教員が入れ替わる。先輩教職員が積み重ねてきた教員文化や教育力の伝承は大きな課題である。

また、教員希望者数の横ばいと教員採用者数の増加は志願・合格倍率にも影響を与え、結果として、実践的指導力が十分身についていない者や、多様化、複雑化する教育課題に十分対応できない者も見受けられる。採用直後から高い専門性をもつ教員の育成や教職キャリアステージ各期に相応しい職能発達に対する支援等をとおして、「まなび続ける教師」としての資質能力の向上を図ることは喫緊の課題と言える。

とりわけ、実力あるミドルリーダー、スクールリーダーの養成は急務である。これまで、中堅教員は同僚教員との協働実践、児童生徒や保護者等との関わりを通じて教員としての資質能力を向上させ、学級・教科担任、学年主任、分掌主任等の経験を積み重ねる中でミドルリーダーとしての力量形成を図ってきた。しかし、分掌主任や校務推進役として活動する機会に乏しかった現状に加え、今後はミドルリーダーとして期待される相当年齢も下がる。早い段階から組織のリーダー的視点をもって教育指導や分掌経営ができる人材を養成することが必要であり、大学と教育委員会は連携・協働して、現職研修プログラムの改善、高度化を図り、計画的、継続的なミドルリーダー、中堅教員養成に取り組まねばならない。

また、校長・教頭等管理職のマネジメント能力が問われることは論を俟たないが、同時に、自ら学級担任や教科担任として勤務しながら、学年、校務分掌や教科部会等をリードし、年齢、指導力や学年、分掌を乗り越えた「コーディネーター」、「アドバイザー」として生き生きと働くミドルリーダーの存在は学校組織を活性化し、教職員に元気と活力を与える。ミドルリーダーには、組織運営や学校経営の現状を正しく見極め、見えにくい課題をあぶり出し、その解決に向かうこと、組織内の役割分担、連絡調整や同僚に対する指導助言や支援ができること、そして、豊かな人間関係を築き、組織を前向きに元気づけること等の能力が必要である。

学校全体のマネジメントを意識し、人材育成の視点をもって組織経営や分掌運営にあたる人材、若手教員から「憧れ」の眼差しで慕われる人材の育成が今後の学校経営・運営を左右すると考え、本プログラムを開発することとした。

(3) これまでの連携・協働を生かし、一層の拡充に対する思い

山口大学教育学部と山口県教育委員会、山口市教育委員会は、平成 17 年 12 月に「山口大学教育学部・山口県教育委員会・山口市教育委員会の教育連携推進協議会要綱」を定め、教員養成・研修にかかる協議会の設置、各機関実施事業の報告、次年度協働事業の計画や実施等を行ってきた。人事交流面でも小中学校教員（交流人事教員）の採用が進み、平成 18 年度に 1 人が採用された。平成 20 年度からは 2 人、平成 27 年度からは 3 人に増員され、日常的な研究協議や情報・意見交換が行われている。

次に、教職大学院についても、開設の構想・準備段階から緊密な連携がなされ、制度設計、環境整備、対外交渉、人事措置等様々な面で格段の支援を得てきた。「学校経営コース」への現職教員派遣では、連携・協働の結果、関係市町教育委員会や学校等との折衝や調整もスムーズに進み、有能有望な現職教員院生の派遣を得ている。

また、平成 17 年度以降は、「ちゃぶ台方式による協働型教職研修計画（ちゃぶ台プログラム）」に取り組み、教職志望学生・大学教員・現職教員・教育行政担当者・教育関係者等との協働による教員養成・教員研修事業の活性化を図ってきた。ここでも山口県教育委員会とは緊密に連携・協働し、特に人材育成・教員研修のベクトル共有に努め、平成 21 年度以降、（独）教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」や（独）教職員支援機構「教員の資質向上のための研修プログラム開発事業」を共に開発している。

現在、大学と教育委員会の連携・協働による教員の養成・採用・研修の一体的取り組みが大いに期待されている。今後より一層の拡充を図るため、本プログラムを協働して開発することとした。

２．開発プログラムの目的、対象や方法等

(1) 開発プログラムの目的

本プログラムは、山口県の学校・地域が抱える教育課題の解決に向けて理論的・実践的なアプローチを加え、学校等における指導的役割を担える人材を養成しようとする本学教職大学院の思いと、山口県「人材育成に向けた５つの基本方針」のもと、学校、市町教育委員会、大学や地域等と一体となって教職員の養成・採用・研修等に取り組み、山口県教育を担う教職員の人材育成を進める山口県教育委員会の思いをつなぐ「架け橋プログラム」である。

これまでも、本学は山口県教育委員会と連携して、「教職志望学生・臨時的任用教員・若手正規教員」や「中堅教員に向かう前の若手教員」を束ねた教員養成・研修プログラムを開発してきた。その中で、「自立・向上期」や「充実期」にある教員には、教育に対する情熱・使命感や教育的愛情、学習指導や生徒指導等で求められる実践的指導力、他者（子ども、教職員や保護者等）と共同する力や若手教員をリードする高い専門性等が必要なことを明らかにしてきた。

同時に、急激に変化する社会や教育環境の中で、子どもたちや地域が抱える教育課題も、多様化、複雑化、高度化している。それまで、自分の学級、担当教科、校務分掌の中で試行錯誤を繰り返してきた若手教員が、次第に学年、校務分掌や学校全体を見渡す視野の広がりと実践力を求められるとともに、見えにくい学校・教育課題を発見し、同僚とともに適切な対応を模索し、組織としての動きをつくり、困難にひるむことなく解決を図るミドルリーダー、スクールリーダーに成長することが求められるようになったことも実感してきた。

そこで、本プログラムでは、本学（教職大学院）が実施する自主的・自発的なミドルリーダー養成プログラム受講生や本学教職大学院生（現職教員・学部卒院生）の、課題解決力、組織的協働力、人間性等の育成を図ることを目的とし、そのために、教職大学院「地域科目」と「ちゃぶ台ミドルリーダー養成プログラム」を融合・相乗する教職大学院カリキュラム・教員研修プログラムの開発を行うこととした。

(2)開発プログラムの対象

本プログラムの研修対象を、①本学大学院教職実践高度化専攻（教職大学院）院生（現職教員院生、学部卒院生） ②公募（大学・教委 HP）により受講する現職教員（教員経験 3～15 年目頃まで） ③連携する教員養成・研修プログラム「ちゃぶ台次世代コーホート」の修了者のうち受講を希望する現職教員とした。①については、教職大学院科目「山口県教育の現状と課題」履修者も参加させることとした。教職大学院は、その教育課程編制にあたり、デマンドサイドのニーズに応える授業科目の開設や配置を行っている。「山口県教育の現状と課題」は、山口県教育委員会の教育重点課題をもとに、学力向上、キャリア教育、教育の情報化・高度化、人間関係づくり、校種間連携や地域と共にある学校づくり等の内容について実践的に研究する科目として開設していることから、学修効果が高いと判断した。

加えて、公募により参加する現職教員が見せる自発的、意欲的な研修態度は、まさに「学び続ける教師」の具現化としてあり、教職大学院生、特に学部卒院生にとっては「目指すべき教員モデル」として、現職教員院生にとっては「進歩し続ける教職仲間（CO-fort）」として傍にあると考え、共に研修組織を立てる仕組みにした。

また、県内巡回型公開講座の導入（県内 4 箇所・地域）により、地域（会場校や隣接学校等）の教職員、教育関係者や教育委員会職員等にも開放し、各対象研修としても機能するようにした。

(3)開発プログラムの構想と編制

本プログラムで編制する研修組織、取り扱う研修内容や手法等を、以下のように構想し、研修プログラムを具体化する作業を開始した。

教職大学院は、山口県教育委員会と連携しミドルリーダー養成プログラム「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course」を実施し、教員（若手～中堅）のミドルリーダーとしての資質能力を高める。その中で、ミドルリーダーとしての必要課題の学習、教職実践や課題研究の発表と研究協議、指導助言体験等を通した体験的・省察的学び、ピア・サポートによる連帯的な課題解決やネットワーク形成等を行い、学ぶ中でともに高め合う「ちゃぶ台方式」により研修の高度化を図る。

教職大学院は、市町教育委員会と連携し、県内各地域の教育諸課題を反映した教職大学院科目「山口県教育の現状と課題」を開設し、地域課題の解明や、解決方途の探究を行い教職大学院科目の高度化を図る。同時に「巡回型公開講座」を通して地域教職員研修の活性化を

図り、ミドル・スクールリーダーとしての視野の拡大、地域課題の実践的理解や解決に向けた実地研修等を連動させる。

ミドルリーダー養成プログラム「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course」と教職大学院科目「山口県教育の現状と課題」は、それぞれの特性やよさの融合・相乗を図るため、一体のものとして実施する。そこで、公募等で決定した「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course」受講生に教職大学院生（現職教員・学部卒院生）を加え、約 40 人の研修組織（Co-fort）を設立し、通年・積み上げ型の研修を開始する。

研修行事は、この研修組織が単独で行う場合と、連携研修プログラム（教職志望学生と若手教員による教員養成・研修の一体化プログラム）「ちゃぶ台次世代コーホート」と合同で実施する場合がある。

以上をふまえて、本プログラムは、次の編制や予定で実施することとし、県内 4 箇所での「巡回型公開講座」を含む連続研修講座の形で実施することとした。

○「ちゃぶ台次世代コーホート advanced course」単独の研修行事
研修実施時期：6 月、8 月（2 回）、10 月、11 月、3 月の土曜日開催
研修実施場所：山口大学＋萩・美祢・柳井・山口市

○「ちゃぶ台次世代コーホート」への乗り入れしての研修行事
乗り入れ研修時は、発表者、指導助言者として参加し、指導助言体験等を中心とする
研修実施時期：10 月、12 月、2 月、3 月の土曜日開催
研修実施場所：山口大学

本開発プログラムの主となる研修行事「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced course」は、以下の個別研修プログラムで構成することとした。

○「招聘講師等による講義演習」
(必要課題)
受講者がミドルリーダーとして身につけるべき研修課題として、実行委員会や運営委員会が提示し課題研修を行う。この研修では、県や市町（地域）が有する現代的教育課題（山口県課題）の現状や課題、分析や解決に向けた提案等を積極的に取り上げ、地域密着型の課題研修プログラムとして展開する。
(要求課題)
受講者が日々の教育実践や学校運営を振り返り、「目指す学校像」や「求める教員像」等と関連した研修課題や実践事例を持ちより、自主的・自発的・連帯的にミドルリーダーへの道を歩む研修を行う。研修会では、次回の研修課題を受講者相互の協議で決定し、実践事例や現状分析等を行う。

○「実地指導研修（学校現場での課題研修、協働実践を含む）」
指導助言力や表現力等の向上に資するとともに、受講者自らの教育実践や研修成果を開示・提供しながら「教えることにより学ぶ」研修を行う。分掌主任の擬似的体験や「ちゃぶ台次世代コーホート」を活用した若年教員への指導助言体験等を行う。
また、学校現場での実地研修や大学教員等との協働による課題研修、協働実践等を行う中で、課題解決に向けた実践的指導力やリーダー性の向上に努める。

○「ピア・サポート」
受講者同士が、各個の体験に基づき、学習指導、生徒指導、学校運営、分掌経営や現代的諸課題の実践上の悩みや不安、成功・失敗体験事例等について自己開示し、課題や問題点の共感的理解、課題解決に向けた協議や意見交換等を行う。
また、「同じ世代の教職仲間ならではの連帯感を深め、人間関係づくりやネットワーク形成を行う。

研修内容は、研修生自身が課題の発見、把握、解明方途の構想や実践を行うことが大切であり、研修生集団に内容検討と研修計画立案等を行わせるように配慮した。

その他、本プログラムでは、ミドルリーダー等養成研修、教職大学院カリキュラム、大学と地域の連携等に関する関係者への聞き取りや状況調査を行う。

加えて、研修生の研修意欲を喚起し、（独）教職員支援機構や他大学主催講座等、より高度な学外研修への参加や研修生交流等による切磋琢磨を図ることとした。

Ⅲ　開発の実際とその成果

１．開発の方法と組織運営の実際

(1) 山口大学の特色ある取組「ちゃぶ台方式」との関わり

既に述べたように、山口大学は、平成 17 年度以降「ちゃぶ台方式による協働型教職研修計画（ちゃぶ台プログラム）」に取り組んできた。

今日、学校をはじめとした教育現場には様々な現代的教育課題が山積し、これらの課題に適切に対応できる教員が求められている。しかし、その養成や資質能力の向上は、大学のみで達成されるものではなく、学生、大学教員、現職教員、教育行政関係者や保護者等多くの者の協働による広くより深い学びの保障が必要となる。その中では、これらの関係者は教える者と教えられる者という一方的関係でなく、互いに研鑽し合う関係であるべきである。上座・下座のない丸い「ちゃぶ台」を囲むように、互いの学びを深め合い共有する場と機会を創り、教育現場で生きて働く「臨機の力」を育てたい。

山口大学は、この理念による協働型教職研修事業（ちゃぶ台プログラム）に取り組んでおり、本プログラムもその一つとして開発した。

(2) 開発・推進組織づくりの考え方と構成

本プログラムの開発では、山口大学教育学部・山口県教育委員会・山口市教育委員会で構成する既存組織「教育連携推進協議会」のもとに、大学（教員養成・教員研修事業担当チーム）教員、山口県教育委員会（教員研修担当課）担当者で構成する「実行委員会」を組織し、基本方針、企画検討や評価等を行った。

また、各プログラムや個別研修行事の企画運営は「運営委員会」が担当することとし、大学教員と「受講者代表」が山口県教育委員会担当者の協力や助言を得ながら計画、準備、運営や評価等を行った。

「実行委員会」は年間 3 回、「運営委員会」は各研修プログラムの計画、準備や運営等の作業を中心に各プログラム前に実施した。「運営委員会」には現職教員がおり、校務等と重なる場合は、電話連絡やメール交換等で進めた。

推進組織の構成、担当・役割分担等は次のとおりである。

「実行委員会」

	所　属　・　職　名	氏　　名	担　当　・　役　割	備　　考
1	山口県教育庁 教職員課・課長	西　村　和　彦	事業検討、講師派遣、各種調査、資料収集	
2	山口県教育庁教職員課 人事企画班・教育調整監	山　本　　弦	事業検討、講師派遣、各種調査、資料収集	
3	教職大学院・教授	和　泉　研　二	総括	副研究科長
4	教職大学院・教授	佐々木　　司	事業計画、運営	専攻長
5	教職大学院・教授	霜　川　正　幸	総括（主務者）	実務家教員
6	教職大学院・教授	静　屋　　智	事業計画、運営	交流人事教員

「運営委員会」

	所属・職名	氏　　名	担　当　・　役　割	備　　考
1	山口県教育庁教職員課 人事企画班・主査	杉　原　宏　之	事業検討、講師派遣、各種調査、資料収集	教員研修等担当
2	やまぐち総合教育支援センター・研究指導主事	増　田　尚　哉	事業検討、講師派遣、各種調査、資料収集	教員研修センター担当
3	教職大学院・教授	佐々木　　司	事業計画・運営	専攻長
4	教職大学院・教授	霜　川　正　幸	総括（主務者）	実務家教員
5	教職大学院・教授	静　屋　　智	事業計画・運営	交流人事教員
6	教育学研究科・教授	中　田　　充	事業計画・運営	情報教育
7	教職大学院・講師	藤　上　真　弓	連携プログラム担当	実務家教員
8	受講者代表（現職院生）	茂　田　幸　恵	プログラム計画、運営協力	教職大学院
9	受講者代表（学卒院生）	藤　井　龍太朗	プログラム計画、運営協力	教職大学院
10	受講者代表（院外教員）	末　村　和　也	プログラム計画、運営協力	山口市立 平川中学校

本プログラムの開発や推進の体制は、「ちゃぶ台次世代コーホート」の経験から、「実行委員会」が基本方針、企画検討や評価等を行い、「実行委員会」構成団体担当者に受講者代表を加えた「運営委員会」が各研修プログラムの企画運営等を行う形式を採用した。受講者代表を参画させることにより、受講者自らが主体的にプログラム開発に参画することとなり、研修行事の企画、準備、運営や評価等に参画することができた。プログラムの活性化に大いに効果があったと考えている。

「実行委員会」は年間 7 回、「運営委員会」は各研修プログラムの前後に計 11 回実施した。「運営委員会」に現職教員がいることから、毎回の研修プログラム終了後に行う「交流研修会」の場での意見交換やメール協議等を中心に進めた。

(3)委員会の開催と大学・教育委員会の連携

「実行委員会」の実施状況

①第 1 回　平成 29 年 3 月 22 日（水）～「県教員養成等検討協議会」に合わせて～

参加者　山口県教育委員会（教育長、教育次長、審議監、関係各課長、事業担当者等）
教育学研究科・教育学部（学部・研究科長、副研究科長、事務長、担当者等）

内　容　・教育委員会・学校と大学等が連携した教職関係事業に関する協議

・教員の養成・採用・研修のあり方や「教師塾」に関する協議、意見交換
・教職キャリア形成、各ステージ（期）に求められる資質能力や人材育成に関する協議

②第２回　平成 29 年 3 月 27 日（月）～「県・市・学部人材育成検討会議」に合わせて～
参加者　山口県教育委員会（審議監、教職員課長、義務教育課長）
山口市教育委員会（学校教育課長、副参事）
教育学研究科・教育学部（学部・研究科長、副研究科長、事務長、教育研究評議員、事業担当者、交流人事教員等）
内　容・プログラム方針、計画や推進体制等に関する提案と協議
・教職大学院カリキュラムや大学・県・市町教委の連携等に関する意見交換等

③第３回　平成 29 年 4 月 27 日（木）～「教育学部・教育学研究科（教職大学院）・やまぐち総合教育支援センター連携協議会」に合わせて～
参加者　山口県教育委員会（教職員課研修担当、総合教育支援センター研修担当者等）
教育学研究科・教育学部（学部・研究科長、副研究科長、事務長、教育研究評議員、事業担当者、交流人事教員等）
内　容・プログラム設計（地域科目開設）に関する提案、計画や進捗等報告
・教職大学院カリキュラムや大学と県教委の連携等に関する意見・情報交換等

④第４回　平成 29 年 5 月 31 日（水）～「県教員養成等検討協議会」に合わせて～
参加者　山口県教育委員会（教育長、教育次長、審議監、関係各課長、事業担当者等）
教育学研究科・教育学部（学部・研究科長、副研究科長、事務長、担当者等）
内　容・教育委員会・学校と大学等が連携した教職事業に関する協議
・教員の養成・採用・研修のあり方や「教職大学院」に関する協議、意見交換
・教職キャリア形成、各ステージに求められる資質能力や人材育成に関する協議

⑤第５回　平成 29 年 7 月 26 日（水）～「学校組織マネジメント強化連携協議会」後～
参加者　山口県教育委員会（教職員課班長、教員研修担当者、管理主事等）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、交流人事教員等）
内　容・教職大学院カリキュラムへの山口県教育課題の反映に関する意見・情報交換
・ミドルリーダー養成に資する研修プログラムに関する協議、意見交換等

⑥第６回　平成 29 年 11 月 20 日（月）～「県教員養成等検討協議会」に合わせて～
参加者　山口県教育委員会（教育次長、審議監、教職員課長、関係各課長、担当者等）
教育学研究科・教育学部（学部・研究科長、副研究科長、事務長、教育研究評議員、事業担当者、交流人事教員等）
内　容・事業全体の中間報告（成果と課題等）、来年度計画に関する協議
・大学院カリキュラム、「地域科目」や大学と県教委の連携に関する意見交換等

⑦第７回　平成 30 年 3 月 8 日（金）～「教育学部・教育学研究科（教職大学院）・やまぐち総合教育支援センター連携協議会」に合わせて～
参加者　山口県教育委員会（教職員課研修担当、総合教育支援センター研修担当者等）
教育学研究科・教育学部（学部・研究科長、副研究科長、事務長、教育研究評議員、専攻長、事業担当者、交流人事教員等）
内　容・プログラムの総括（事業評価、成果と課題）と来年度計画に関する協議
・教職大学院カリキュラムや大学・県教委の連携等に関する意見・情報交換等

「運営委員会」の実施状況

①第１回　平成 29 年 4 月 11 日（火）～「スクールリーダー研修打合会議」に合わせて～
参加者　山口県教育委員会（教職員課主査）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、交流人事教員）
内　容・スクールリーダー養成に関する協議、意見交換

②第２回　平成 29 年 5 月 9 日（火）～「学校組織マネジメント強化連携協議会」後～
参加者　山口県教育委員会（教職員課班長、主査、管理主事等）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、交流人事教員等）
内　容・ミドルリーダー養成に資する研修プログラムに関する協議、意見交換等

③第３回　平成 29 年 6 月 13 日（火）～「福井大ラウンドテーブル打合会」に合わせて～
参加者　山口県教育委員会（総合教育支援センター所長、次長、教員研修担当者）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、交流人事教員等）
内　容・昨年度までの事業（プログラム）総括と改善に関する協議

④第４回　平成 29 年 6 月 27 日（火）～「社会教育主事研修講座」後～
参加者　山口県教育委員会（社会教育文化財課班長、主査、社会教育主事）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、コミ・スク指導担当教員）
内　容・プログラム内容（地域協育ネット、学社連携・融合と授業科目、カリキュラム）の検討、意見交換等

⑤第５回　平成 29 年 8 月 26 日（土）～「県スクールリーダー研修講座」後～
参加者　山口県教育委員会（教職員課班長、教員研修担当者、管理主事、義務教育課指導主事等）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、交流人事教員等）
内　容・スクール・ミドルリーダー養成における連携に関する意見・情報交換等

⑥第６回　平成 29 年 7 月 21 日（金）～「県地域連携教育プロジェクト部会」後～
参加者　山口県教育委員会（義務教育課班長、主査、社会教育文化財課班長、社会教育主事等）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、交流人事教員、教職大学院特任教授）
内　容・プログラム内容（地域連携、人材育成、いじめ等と授業科目）の検討等

⑦第７回　平成 29 年 10 月 12 日（木）～「県初任研等担当者会議」に合わせて～
参加者　山口県教育委員会（義務教育課主査、指導主事）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、交流人事教員）
内　容・プログラムの進捗確認と年度後半の研修プログラムの検討

⑧第８回　平成 29 年 10 月 21 日（土）～「県スクールリーダー研修講座」後～
参加者　山口県教育委員会（教職員課班長、教員研修担当者、管理主事等）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、交流人事教員等）
内　容・スクール・ミドルリーダー養成における連携に関する意見・情報交換等

⑨第９回　平成 30 年 1 月 25 日（木）～「県地域連携教育推進協議会」後～
参加者　山口県教育委員会（義務教育課班長、主査、社会教育文化財課担当者等）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、交流人事教員、教職大学院特任教授）
内　容・第 8～10 回研修会の実施計画や連携強化に関する協議

⑩第 10 回　平成 30 年 2 月 19 日（月）～「県初任研等担当者会議」に合わせて～
参加者　山口県教育委員会（義務教育課主査、指導主事）
教育学研究科・教育学部（事業担当者、交流人事教員等）
内　容　・第 8～10 回研修会の実施計画や連携強化に関する協議

⑪第 11 回　平成 30 年 3 月 13 日（火）～「山口大学・山口県教育委員会・山口市教育委員会連携推進の集い」に合わせて～
参加者　山口県教育委員会（教育長、教育次長、審議監、各課課長、担当者等）
山口市教育委員会（教育長、学校教育課長、副参事）
教育学研究科・教育学部（学部・研究科長、副研究科長、事務長、教育研究評議員、専攻長、事業担当者、交流人事教員等）
内　容　・県内巡回型研修の進捗に関する協議、意見交換
・プログラム総括、評価と今後の教職大学院・教育学部カリキュラムにかかる協議、意見交換
・次年度の教員研修事業方針、企画・運営等にかかる意見・情報交換等

「その他の連携」の状況

本プログラムでは、上記の組織的連携に加え、運営スタッフ会議（学部スタッフ、受講者代表で随時開催）での助言や支援、山口県教育委員会発行の「山口県教育関係人材データバンク」による指導者バンクや情報の提供、毎回の研修行事への出席と場での指導助言、事業の広報や参加推奨にかかる支援として県教委ウェブページへの掲載、市町・学校への逓送便やメールリストの優先使用、県・市校長会や研修行事、採用前研修会等での各研修行事の紹介、ミドルリーダー養成研修にかかる情報資料の提供等を得た。

山口県教育委員会や県内各市町教育委員会の温かいご理解・ご支援心より感謝するものであり、日頃からのきめ細かで具体的な連携の取組が必須であることを学んだと言える。

２．受講者の構成と募集、広報周知の実際

(1)受講者の構成

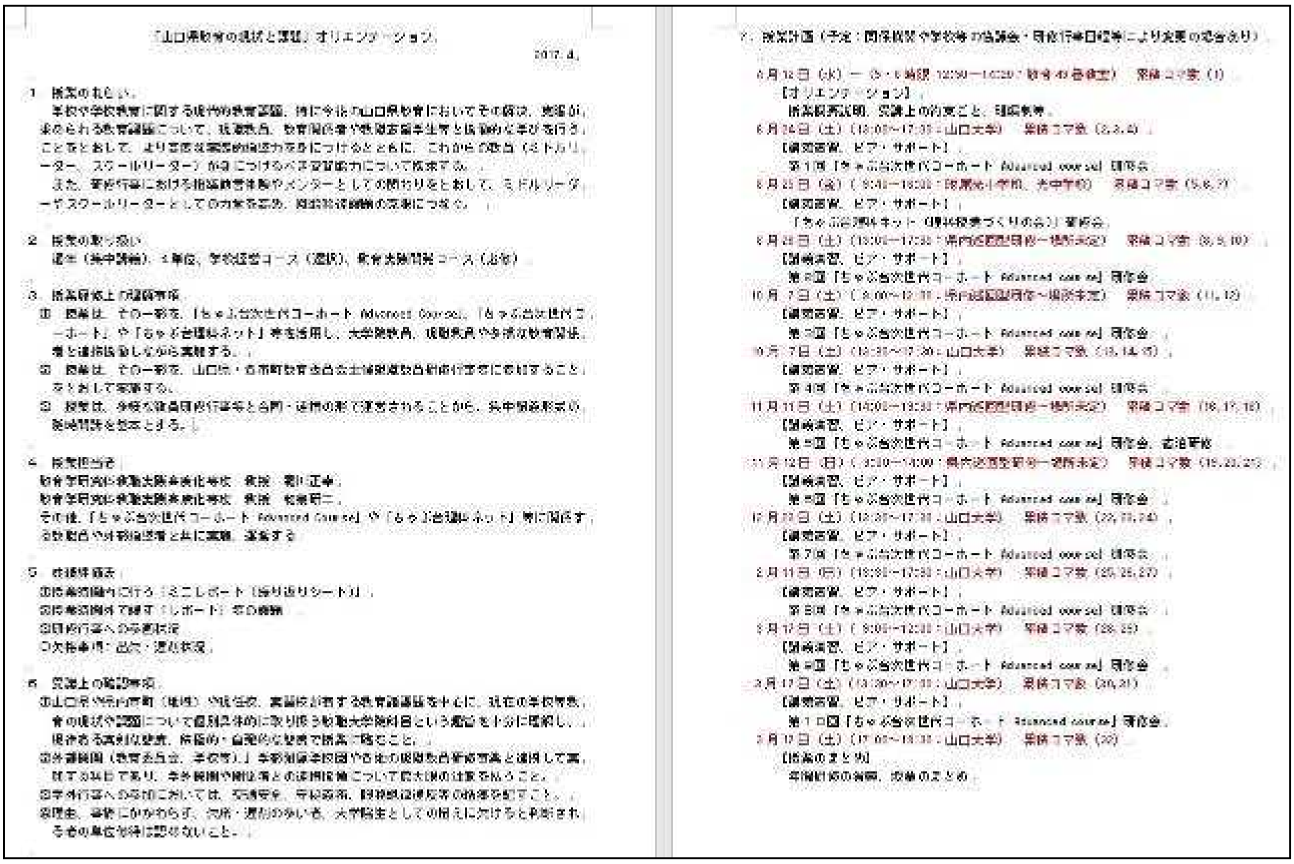
本プログラム受講者は、既に示したように３つの群で構成した。①本学大学院教職実践高度化専攻（教職大学院）院生（現職教員院生、学部卒院生）　②公募（大学・教委 HP）により受講する現職教員（教員経験 3～15 年目頃まで）　③連携する教員養成・教員研修プログラム「ちゃぶ台次世代コーホート」の修了者のうち受講を希望する現職教員である。

①の教職大学院生群は、県内学校や地域が抱える教育的諸課題、県教育が有する先進的・革新的取組を取り扱う「山口県教育の現状と課題」履修者が中心である。この科目は、学部卒院生が所属する「教育実践開発コース」では「必修科目」、現職教員院生が所属する「学校経営コース」では「選択科目」とし、通年開設の 4 単位科目として開設した。「授業オリエンテーション」、「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced course」、教科指導や授業づくりを主眼とし附属学校を会場に行う「授業づくりの会」、「省察・総括」を授業に取り込み計 32 コマ（64 時間）を充てて実施した。次ページに授業概要を示す。

一方の自ら受講を希望した現職教員群について報告する。本プログラムはあくまで自主的、自発的参加を原則とするものである。「参加できる時に、参加できる範囲や形で、自由に関わる」ことが前提であり、プログラム自体を広め、興味関心や意欲を持たせ、「自腹を切ってでも山口に行く」という行動につなげることが必要となる。

とはいえ、本プログラムが、ミドルリーダーとして成長するための「必要課題」の学修や、県内学校等が有する現代的教育諸課題の開発、解決を目指す内容で編制し、系統的・計画的な職能開発を意図したものである限りは、できるだけ多くの受講者があることを期待する。

これらのことから、本プログラムの開発・推進においては、山口県教育委員会とや市町教育委員会との連携・協働に頼る部分が極めて大きかった。以下の項でふれていく。



「山口県教育の現状と課題」オリエンテーション

2017.4

1 授業のねらい

2 授業の取り扱い

3 授業計画上の留意事項

4 授業担当者

5 成績評価

6 受講上の確認事項

7 授業計画（予定：関係機関や学校等の協議会・研修行事日程等により変更の場合あり）

(2)プログラムの募集、広報周知

本プログラムの広報周知については、特に「必修科目（学校経営コースは選択）」とされた教職大学院生に対する説明に配意した。「授業オリエンテーション」の中で、プログラム開発の意義や目的を明確に示すとともに、現職教員の置かれた状況や教職キャリア形成や職能発達にかかる課題等をふまえ、意欲的な研修意欲・態度や教育諸課題への興味関心を誘発する働きかけとなるよう配意した。

また、「ちゃぶ台プログラム」の特長を前面に出すことに努め、受講生や大学教員、教育機関担当者や地域の教育関係者等が、それぞれの立場から、或いは立場を越えて協働し、様々な教職実践の開示・共有と省察により、学校教育や教育事象の具体的な理解と、課題解決能力やコミュニケーション能力等の実践的能力を向上させるスタイルであること、同年代の教職仲間の存在、連帯性や関係性を重視するべきことを指導した。

山口県教育委員会（教育庁教職員課）には、プログラム構想段階から、高等学校や市町教育委員会等に対し本プログラムに関わる意義や構えを示し、研修プログラムの広報周知や推奨、各校種の校長会等での広報や協力依頼や山口県教育委員会（教職員課）ホームページへの掲載等について多大な協力や支援を得た。

山口県

平成29年（2017年）12月27日

「ちゃぶ台」を囲む若手教員の「夢」をミドルリーダーとしての「志」につなぐ協働型教員研修モデル（ちゃぶ台次世代コーホート Advanced course）について

教育委員会と大学等が連携・協働し、教員の養成段階から教職生活全体を通した学びを支援し、教員の資質能力の向上に努めることが求められています。特に、教育課題がますます高度化、複雑化する中で、今後の学校教育を中核となって担う中堅教員（ミドルリーダー）の育成は重要な課題となっています。

本県では、教職員の人材育成の在り方について、養成、採用、研修、評価、人事異動等の各段階における検討を総合的に進めており、その一環として、山口大学大学院教育学研究科（教職大学院）・教育学部と連携し、若手教員を対象とした協働型教員研修事業に取り組んでいます。

事業、研修の概要

山口大学大学院教育学研究科・教育学部

1 事業名称

「ちゃぶ台」を囲む若手教員の「夢」をミドルリーダーとしての「志」につなぐ協働型教員研修「ちゃぶ台次世代コーホートアドバンストコース（Advanced course）」

2 推進体制

実施主体は山口大学大学院教育学研究科（教職大学院）・教育学部ですが、山口大学教育学部、山口県教育委員会、山口市教育委員会で構成する「教育連携推進協議会」のもとで、大学と教育委員会の連携事業として推進します。

3 事業概要

大学は、教育学部ホームページ上の「e-ちゃぶ（ちゃぶ台プログラム広報用ウェブページ）」において受講生募集やプログラムの広報周知を行った。

また、経験 3 年未満の若手教員や臨時的任用継続年数の長い教員等が参加する「ちゃぶ台次世代コーホート」受講生が移行する可能性があり、積極的な参加推奨を行いたいと考え、同プログラムを受講する現職教員会員に対する情報提供を積極的に行い、プログラムへの参加を呼びかけた。

(3)受講者の現況

本プログラムには、教職大学院の院生受講者 25 人と公募による受講者 16 人の計 41 人が参加し、県外（広島県）からの受講者も 3 人あった。

教職大学院生受講者は 2 区分され、「学校経営コース」に在籍する現職教員受講者は校種別に小学校 5 人、中学校 5 人、高校 1 人、特別支援学校 1 人の計 12 人、教員経験は 9 年目～24 年目であった。「教育実践開発コース」の院生は 13 人で、現場経験等はない。終了後の任用希望校種は、小学校 4 人、中学校 6 人、高校 3 人となっている。

一方、計画当初 20 人を予定していた公募による受講者は、山口・広島県から 16 人が参加した。校種別は小学校 7 人、中学校 3 人（研究指導主事 1 人を含む）、高校が 6 人（同）の計 16 人、教員経験は 4 年目～17 年目であった。昨年度までの「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced course」からの継続が 10 人（小学校 3 人、中学校 2 人、高校 5 人）、新たに勤務校の校長等から受講推奨された者や広報等により希望した者が 6 人（小学校 4 人、中学校 1 人、高校 1 人）であった。新規参加の理由としては、「今後、中堅教員の域に達することから研修・生徒指導や進路指導等に関する必要課題や全国的動向を学びたい」、「現場実践の繰り返しの中で、指導の行き詰まりや悩みを抱えている」、「現場の多忙化や勤務過重による研修機会の乏しさが物足りない」等を挙げる者が多かった。現場実践における困難、不安や孤独の状況に加えて、若年教員の研修意欲や研修ニーズはかなり高く、

29年度「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course」会員登録者一覧表

番号	県名	校種	所属	職名	番号	県名	校種	所属	職名
1	広島	小	神石高原町立三和小学校	教諭	21	広島	高校	広島県立大門高等学校	教諭
2	山口	小	岩国市立川下小学校	教諭	22	広島	高校	広島県立日彰館高等学校	教諭
3	山口	小	岩国市立平田小学校	教諭	23	山口	高校	山口県立周防大島高等学校	教諭
4	山口	小	周防大島町立明新小学校	教諭	24	山口	高校	山口県立小野田高等学校	教諭
5	山口	小	山口大学教育学部附属光小学校	教諭	25	山口	高校	山口県立厚狭高等学校	教諭
6	山口	小	山口大学教育学部附属光小学校	教諭	26	山口	高校	山口県立下関西高等学校	教諭
7	山口	小	萩市立椿木小学校	教諭	27	山口	高校	やまぐち総合教育支援センター	研指
8	山口	小	宇部市立船木小学校	教諭	28	山口	特支	山口県立山口総合支援学校	教諭
9	山口	小	美祢市立大嶺小学校	教諭	29	山口	小	山口大学教職大学院	院生
10	山口	小	下関市立豊浦小学校	教諭	30	山口	小	山口大学教職大学院	院生
11	山口	小	下関市立名池小学校	教諭	31	山口	小	山口大学教職大学院	院生
12	山口	小	下関市立向山小学校	教諭	32	山口	小	山口大学教職大学院	院生
13	山口	中	柳井市立柳井中学校	教諭	33	山口	中	山口大学教職大学院	院生
14	山口	中	光市立大和中学校	教諭	34	山口	中	山口大学教職大学院	院生
15	山口	中	萩市立旭北中学校	教諭	35	山口	中	山口大学教職大学院	院生
16	山口	中	防府市華山中学校	教諭	36	山口	中	山口大学教職大学院	院生
17	山口	中	防府市立右田中学校	教諭	37	山口	中	山口大学教職大学院	院生
18	山口	中	山口市立平川中学校	教諭	38	山口	中	山口大学教職大学院	院生
19	山口	中	やまぐち総合教育支援センター	研指	39	山口	高校	山口大学教職大学院	院生
20	山口	中	萩市立大島中学校	教諭	40	山口	高校	山口大学教職大学院	院生
					41	山口	高校	山口大学教職大学院	院生

学び直しや継続的な職能開発に対する期待、プログラムの適宜性と拡充の必要性が再確認できた。

公募による受講者の校種別参加者数については、小学校と高等学校が多い。

小学校籍参加者からは、学校現場が有する教育課題の多様化・高度化・複雑化への対応が年々厳しくなり、学び直しや他教職員との協働的・連帯的なネットワーク形成が重要であること、教科指導や学級経営が主となりがちな業務の中で、他領域・活動に関する指導や支援のあり方を研修する必要を感じていること等が参加の理由として挙げられている。

高等学校籍参加者からは、他校種に比べて高等学校の授業改善や学校改革はかなり遅れており、校内研修を含め研修機会が少ないこと、各担当教科に関する高度な専門性を求める中で他教科・領域の先進実践から学ぶことや、同僚性・協働性溢れる教職員組織を形成する必要を感じる等が指摘されている。

中学校に対しても同様に、広報周知、管理職による参加推奨等は行われているが、週休日開講による学校行事、部活動や土曜日授業等との重なり、県内全小中学校が指定されたコミュニティ・スクール主催行事の増加等の課題が表出し、今後、各市町・学校域で検討される学校や教職員の業務改善等の動きと合わせ、行政研修との相乗、共存を検討していきたい。

各校種における学校教育・運営上の課題、職能開発の重要性の観点から、本プログラムのような校種や経験を乗り越えた研修プログラムの開発、ピア・サポートの充実を進めることが必要と再認識した。

３．プログラムの実際（研修内容、講師や研修スタイルの具体）

以下、本プログラムにおいて展開した研修行事の具体と成果、課題等を報告する。各地の大学や教育委員会等での実践や利活用に資するため、各研修行事のねらい、研修内容、手法や招聘講師等について具体的に報告する。

(1)研修行事「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced course」研修会

第１回　平成 29 年 6 月 24 日（土）13:00～17:30

場　所　山口大学教育学部「21 番教室」

目　的　・山口県教育の現状と課題の理解、ミドルリーダーのあり方に関する実践的研修
・山口県の教育課題①「山口県教育の現状、課題と教育施策」に関する理解
・企業マネジメントに学ぶリーダーシップ論とミドルリーダーの資質能力の解明
・チームビルディングに関するワークをとおした研修集団づくりとピア・サポート

内　容　(1) 開講行事
挨拶（研究科長 丹 信介）、研修びらき、研修プログラム・受講生紹介等
(2) 講義演習
テーマ 「山口県教育の現状、課題と教育施策」
指導者　山口県教育庁教育政策課 主幹
（教育企画班長） 中﨑由規 さん

(3) 講義演習
テーマ 「より良い組織形成とリーダーシップのあり方」
指導者　ANA ビジネスソリューション株式会社 専属講師 新開千恵 さん
(4) 演習、ピア・サポート
演　習 「ミドルリーダーに求められる資質能力と自分自身 」
指導者　山口大学プログラム運営スタッフ（教職員）
(5) 研修のまとめ

参加者　受講教員 25 人、教職大学院生 14 人、講師・スタッフ等 12 人　計 51 人

第２回　平成 29 年 8 月 26 日（土）13:00～21:00
場　所　萩セミナーハウス（県内巡回型研修）
目　的　・山口県の教育課題②「教職員研修の活性化」に関する現状と課題の理解
・文部科学行政や外国調査をふまえた教育実践とミドルリーダーの役割の解明
・自校の課題解決（教職員研修）に資するマネジメント研修、ピア・サポート活動
内　容　(1) 開講行事
挨拶（萩市教育長）、プログラム・教職大学院紹介等

(2) 講義演習
テーマ　「校内研修で授業力を鍛える」
指導者　　山梨県甲府市立千代田小学校　教頭　一瀬孝仁　さん
（前　山梨大学大学院教育学研究科教育実践創成専攻　准教授）
(3) 研究協議
演　習　「教職員研修の活性化に向けて」
指導者　　山口大学プログラム運営スタッフ（教職員）

(4) 講義演習
テーマ　「文部科学行政と外国調査」
指導者　　文部科学省生涯学習政策局　参事官付　岸本睦久　さん
(5) 研修のまとめ
参加者　受講教員 43 人（うち萩市内教員 16 人）、教職大学院生 11 人、講師・スタッフ等 12 人　計 66 人

第３回　平成 29 年 8 月 27 日（日）9:10～12:00
場　所　萩・明倫学舎（県内巡回型研修）
目　的　・山口県の教育課題③「教員集団形成とコーチング」に関する現状と課題の理解
・歴史・文化遺産を取り込んだカリキュラム開発のあり方に関する研修
・教育施設見学、歴史・文化遺産の見学研修
内　容　(1) 開講行事
(2) 講義演習

テーマ　「教職員のための 21 世紀型教育を考える」
指導者　　ユアクリニックお茶の水　院長
（医学博士）　杉原　桂　さん
東京慈恵会医科大学・昭和大学　非常勤講師　橋本ゆかり　さん
ワークリーダー　NLP マスタープラクティショナー　石本裕子　さん
(3) 実地研修
テーマ　「歴史・文化遺産を取り入れたカリキュラム開発の構想研修」
指導者　　萩・明倫学舎指導者、山口大学プログラム運営スタッフ（教職員）
(4) 研修のまとめ
参加者　受講教員 14 人（うち萩市内教員 4 人）、教職大学院生 12 人、講師・スタッフ等 10 人　計 36 人

第４回　平成 29 年 10 月 7 日（土）9:30～12:15
場　所　サンワーク美祢（県内巡回型研修）
目　的　・山口県の教育課題④「カリキュラムマネジメント」に関する現状と課題の理解
・自校の課題解決（特色ある教育活動）に資するマネジメント研修
・ピア・サポート活動
内　容　(1) 開講行事
挨拶（美祢市教委学校教育課長）、プログラム・教職大学院紹介等
(2) 講義演習

テーマ 「カリキュラムマネジメントを支えるミドル・リーダーシップ」
指導者　愛知教育大学大学院教育実践研究科 教授 倉本哲男 さん

(3) 演習、ピア・サポート
テーマ 「ミドルリーダーに求められる資質能力 」
指導者　山口大学プログラム運営スタッフ（教職員）
(4) 研修のまとめ

参加者　受講教員 29 人（うち美祢市内教員 9 人）、教職大学院生 12 人、講師・スタッフ等 15 人　計 56 人

第５回　平成 29 年 10 月 7 日（土）13:30～17:30
場　所　山口大学教育学部「21 番教室」（実地指導研修）
目　的　・教員キャリア形成のあり方、「学び続ける教師」や学級づくり等の理解
・若年教員や学生に対する指導助言体験をとおした指導力の養成
・山口県の教育課題⑤「学級づくり、集団経営」として実施
内　容　(1) 開講行事
挨拶（教育学部長 丹 信介）、研修びらき、プログラム概要・研修生紹介

(2) 講義演習
講　義　「若手教員に望むこと」
指導者　山口市立大内中学校 校長 阿部正二郎 さん
(3) グループ演習、ピア・サポート
テーマ 「私の学級づくり」
指導者　山口大学プログラム運営スタッフ（教職員）
「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course」受講生
(4) 研修のまとめ
参加者　受講教員 20 人、教職大学院生 12 人、講師・スタッフ等 15 人　計 47 人

第６回　平成 29 年 11 月 11 日（土）13:00～17:30
場　所　柳井市役所（県内巡回型研修）
目　的　・山口県の教育課題⑥「いじめ、不登校や不適応等」に関する現状と課題の理解

・柳井市における「いじめ、不登校や不適応等」の実践事例研究と医学的考察
・自校の課題解決（いじめ、不登校等）に関する実践研究、ピア・サポート活動
内　容　(1) 開講行事
挨拶（柳井市教委学校教育課長）、プログラム・教職大学院紹介等
(2) 研究協議、ピア・サポート
報　告　「柳井市におけるいじめ、不登校等の現状と課題」
指導者　柳井市教育委員会学校教育課 指導主事 中西 淳 さん
協　議　「本校の不登校の取組、指導上の配慮事項とミドルリーダー」
指導者　山口大学プログラム運営スタッフ（教職員）

(3) 講　演
テーマ 「学校に行きづらい子どもたち」
講　師　医療法人仁誠会大湫病院 児童精神科医 関 正樹 さん
(4) 研修のまとめ
参加者　受講教員 32 人（柳井市内教員 16 人）、教職大学院生 11 人、講師・スタッフ等 10 人　計 53 人

第７回　平成 29 年 12 月 23 日（土）13:00～17:30
場　所　山口市「ホテルかめ福」（実地指導研修）
目　的　・山口県の教育課題⑦「防災・安全教育、危機管理」
　　に関する現状と課題の理解
　　・教員としての生き方、地域人としての歩み方に関する研修
　　・自校の課題解決（防災教育）に資するマネジメント研修、ピア・サ
　　ポート活動

内　容　(1) 開講行事
　　(2) 講義演習
　　テーマ　「いわての復興教育～防災教育における効果的な指導のあり方～」
　　指導者　岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻 准教授 森本晋也 さん
　　(3) ピア・サポート
　　指導者　山口大学プログラム運営スタッフ（教職員）
　　「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course」受講生

　　(4) 講義演習
　　テーマ　「震災復興に関わる中で～教員として、人としての生き方～」
　　指導者　千葉県市原市立三和中学校 教諭 生稲 勇 さん
　　(5) 研修のまとめ

参加者　受講教員 25 人、教職大学院生 14 人、講師・スタッフ等 12 人　計 51 人

第８回　平成30年2月11日（日）13:00～17:30
場　所　山口大学教育学部（県内巡回型研修・山口地域公開）
目　的　・山口県の教育課題⑧「道徳教育」に関する現状と課題の理解
　　・山口県の教育課題⑨「学習指導、授業づくり」に関する現状と課題の理解
　　・研修成果等の発表による実践研究の振り返り
内　容　(1) 開講行事
　　(2) 課題研究発表
　　発表者　山口県周南市立勝間小学校　教諭 廣末 唯　さん
　　山口県下関市立滝部小学校　教諭 桑原武夫 さん
　　山口県萩市立大井小中学校　教諭 西村和子 さん
　　山口県山口市立大内小学校　教諭 西村史代 さん
　　山口県立高森高等学校　教諭 國居朋子 さん
　　指導者　千葉大学教育学研究科高度教職実践専攻　教授 土田雄一 さん
　　同　准教授 西村隆徳 さん
　　同　准教授 渡邉健二 さん
　　香川大学教育学研究科高度教職実践専攻　教授 植田和也 さん
　　同　准教授 齋藤嘉則 さん
　　(3) 記念講演
　　演　題　「これからの道徳教育への期待」
　　講　師　香川大学教育学研究科高度教職実践専攻
　　教授 七條正典 さん

　　(4) リレーセッション
　　発表者　千葉県流山市立西初石中学校 教諭 髙橋みな さん
　　千葉大学教育学研究科高度教職実践専攻　教授 土田雄一 さん
　　千葉県市川市教育委員会学校地域連携推進課　主査 上地貴之 さん
　　千葉県市川市教育委員会教育政策課　主幹 野口敏樹 さん
　　不登校等児童生徒サポートセンター 相談担当教員 清水早由合 さん

千葉県市原市立ちはら台西中学校　教諭 山口三依子 さん
指導者　千葉大学教育学研究科高度教職実践専攻　准教授 西村隆徳 さん
同　准教授 渡邉健二 さん
香川大学教育学研究科高度教職実践専攻　教授 植田和也 さん
同　准教授 齋藤嘉則 さん

(5) 研修のまとめ

参加者　受講教員22人、教職大学院生12人、講師・スタッフ等10人　計44人

第９回　平成 30 年 3 月 17 日（土）10:00～11:45
場　所　山口大学教育学部「ちゃぶ台ルーム」
目　的　・ミドルリーダー養成講座としてのリフレクション
内　容　(1) グループ演習、ピア・サポートと研修のまとめ
テーマ　「1 年間の研修を振り返る」
指導者　山口大学プログラム運営スタッフ（教職員）
参加者　受講教員 25 人、教職大学院生 14 人、講師・スタッフ等 12 人　計 51 人

第 10 回 平成 30 年 3 月 17 日（土）13:00～17:30
場　所　山口大学教育学部「21 番教室」（実地指導研修）
目　的　・特別支援教育、共生社会の創造等に関する理解
・山口県の教育課題⑩「特別支援教育」の研修
・若年教員の不安や悩みに対する指導助言体験をとおした指導力の養成
・研修の振り返りとともに「学び続ける教師」としての意識を高める研修
内　容　(1) 開講行事

(2) 講演
演　題　「私の歩んだ道～見えないから見えたもの～」
講　師　ヒカリカナタ基金代表、岡山県視覚障害者協会
理事、岡山ライトハウス理事長 竹内昌彦 さん
(3) ピア・サポート、研究協議
テーマ　「教職キャリアデザインと研修の意味」
指導者　山口大学プログラム運営スタッフ（教職員）
「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course」受講生
参加者　受講教員 25 人、教職大学院生 14 人、講師・スタッフ等 12 人　計 51 人

(2) ピア・サポート

本プログラムでは、受講者同士が、各個の教職体験や日々の教職実践等に基づき、学習指導、生徒指導、学校運営、分掌経営や現代的諸課題等の教育実践上の悩みや不安、成功・失敗体験事例等について自己開示し、課題や問題点の共感的理解、課題解決に向けた協議や意見交換等を図り、「同じ世代の教職仲間（コーホート）」としての連帯感を深め、人間関係やネットワークづくりを行っている。この時間は、ミドルリーダー、ヤングリーダーをめざすという共通の「夢」を語り「志」につなぐ貴重な研修機会となっている。

また、受講生の人柄、経歴、悩みや困難の克服経験等を入れ込んだ「振り返りスゴロク」を活用し、人間関係を深める活動にも取り組んだ。こうした同年代教員同士の「横軸」の関わりや、いつでも傍に居てくれると感じる「連帯感や居場所意識、仲間感覚」は、現在の若手教員の教職キャリア形成に不可欠と考えられ、ぜひ全国各地での実践を期待するものである。

(3)その他

本プログラムでは、研修行事に前後して開催する形で「事業運営協議会」も実施し、研修講師と運営スタッフ（県・市町教育委員会担当者、大学教員等）が、教職大学院カリキュラムや「地域科目」の構想、ミドルリーダー研修の内容・方法や指導者、学校現場が求めるミドルリーダーの資質能力、本プログラムに対する評価等について研究協議を行ってきた。

また、市町教育委員会とは、ミドルリーダー養成に資する「巡回型公開講座」や地域に根ざした教職大学院や「地域科目」のあり方等について、研修プログラムの共催をとおして意見交換を行ってきた。

大学と県教育委員会との連携・協働の必要性が説かれ、実際に「交流人事教員」等をチャンネルとした協議や情報交換等は盛んであるが、教職大学院が各地に開設された今もなお、市町教育委員会との組織的なつながりはまだまだ薄い。大学教員個人レベルで各種会議・委員会や指導・講演等業務を受ける中でのテーマ連携が主であり、組織連携につながってはいない。本プログラムでは、「巡回型公開講座」の実施により、会場市教育委員会（学校教育課長や指導主事等）と深みのある協議や意見交換を行うことができた。「研修行事は県の中心にあり知の拠点たる大学で実施するもの」という既成概念を打破し、大学自らが地域に出かける中で、大学や教職大学院の地域貢献と地域教職員研修の活性化を連動することは可能である。大学自身が変わることが求められている。

さらに、本プログラムでは、プログラムの状況（進捗、成果と課題等）にかかる積極的な情報発信に努め、福井大学をはじめとする各地大学での研究大会、「国立大学教育実践研究関連センター協議会」、「全国教育系大学交流人事教員研究交流集会」や関係学会等での実践発表、「日本教育大学協会研究集会（ポスターセッション）」での実践報告、他大学・教育委員会の視察対応をとおしたプログラムの普及拡大も図ることができた。他大学や教育委員会からの研修視察、行事参加や聞き取り訪問も10回を超え、各大学や教育委員会とも危機感や期待感を共有した。

４．プログラム評価の実際、受講者の声に見る成果と課題

(1)プログラム評価の方法等

本プログラムの評価は、各研修行事に合わせて受講者が行う「自己評価」、プログラム推進途中や終了後に行う「本事業（プログラム）総合評価」により実施した。

受講者による「自己評価」については、「自己評価シート」をもとに、受講者が各自の研修活動と省察を記録集積し、今後の時代に求められる教員として求められる資質能力（到達目標）の到達度を自己評価するとともに、研修行事の中で実施される指導担当教員との研究進捗報告、研究協議、意見交換や受指導等をとおして、その形成に取り組んできた。「自己評価シート」については、教職大学院の学部卒院生も受講していることから、現職教員用と学部卒院生用を作成している。

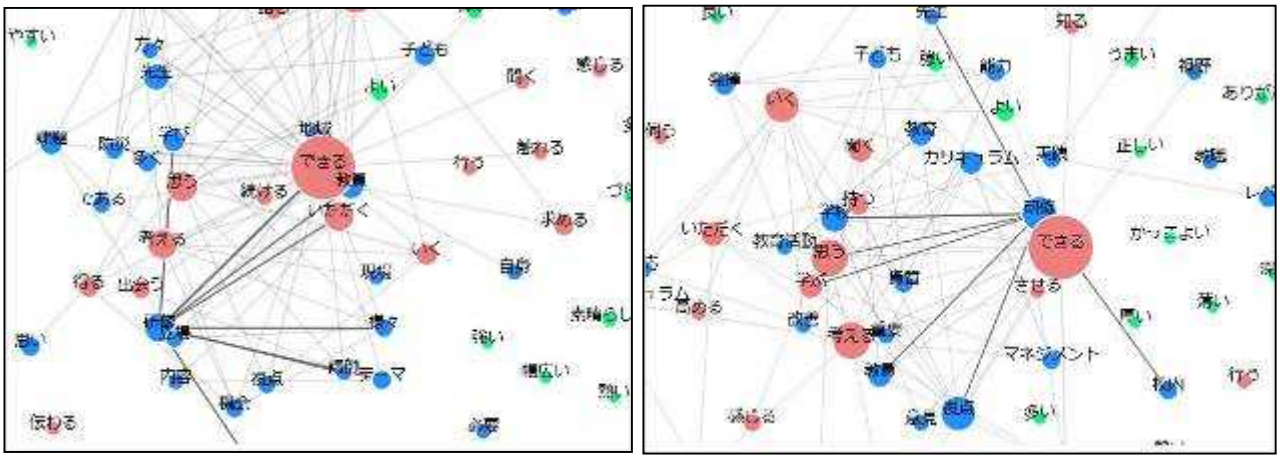
加えて、運営委員会（スタッフ）が年度途中や終了後に総合的評価を行い、各個の到達や成長に関する助言等により職能発達支援を行っている。

(2)プログラムに関する受講者の学びの実感

第８回研修会（2 月）終了後、受講生には「研修リフレクションシート（総括評価）」の提出を求め、受講生の学びを概括することをとおした実感把握を試みた。記載分量の関係から、特にミドルリーダー、スクールリーダーを目指す受講者の属性による「違いと同じ」を把握するため、教職大学院現職教員院生と公募により受講した現職教員を並べて示すこととする。

なお、把握・分析と整理は、ユーザーローカル テキストマイニングツール（http://textmining.userlocal.jp/）による分析を活用した。以下に概要を示す。

○教職大学院現職（左）・公募受講現職教員（右）の「研修をキーとした共起ネットワーク」



○教職大学院現職（左）・公募受講現職教員（右）の「研修内容に関するワードクラウド」

○教職大学院現職（左）・公募受講現職教員（右）の「単語出現比率」

右図は、教職大学院現職教員院生と公募により受講した現職教員から提出された「研修リフレクションシート（総括評価）」に出現した単語を比較したものである。前ページで示した研修をキーとした共起ネットワーク、研修内容に関するワードクラウド、次ページに示す階層クラスタリング、言語ランクや研修行事における受講者との協議や会話等から、同じミドルリーダーやスクールリーダーを目指しながらも、属性による学びの感覚の違いは見受けられる。

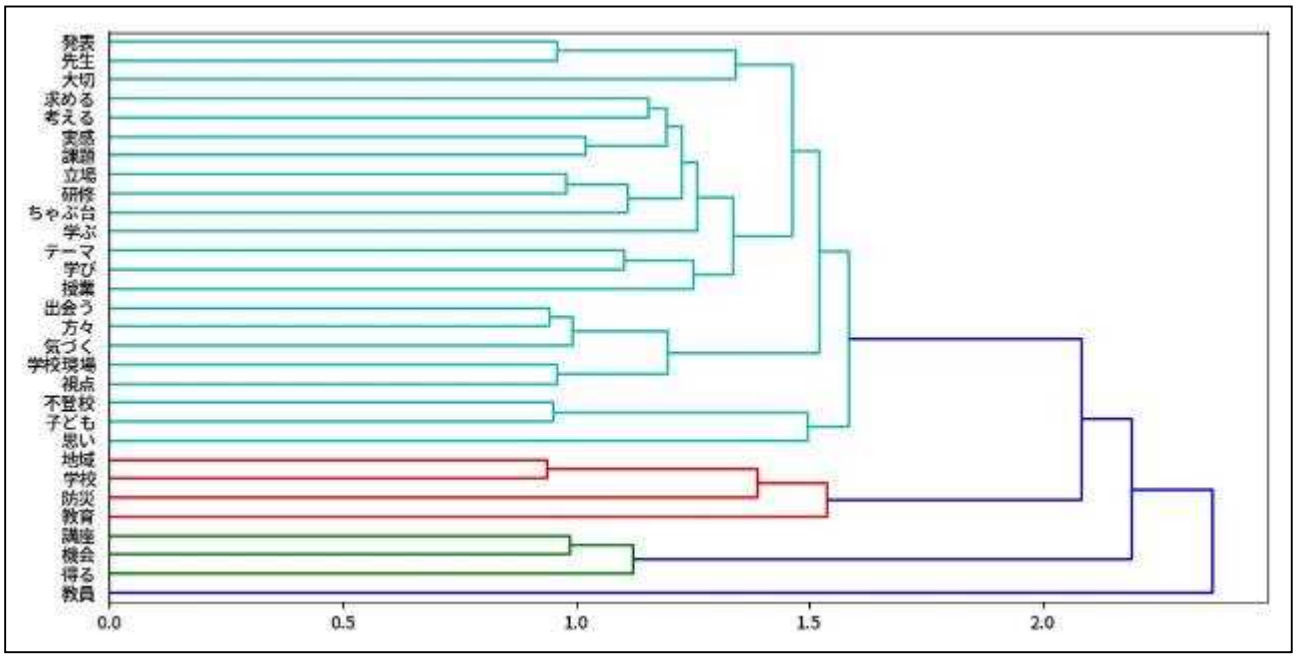
教職大学院在籍現職教員は、個人や各地域の「課題」の解決、学校や教職員等の現状を重視した研修や研修課題の解明に情熱的に向かおうとする傾向が強いのに対して、自主的・自発的に参加する現職教員は、純粋に児童生徒と自身の関わり、教職へ初心や思い、自分の教職キャリアデザイン、今のキャリア形成と研修を結びつけようとする傾向と「勢い」が見受けられる。

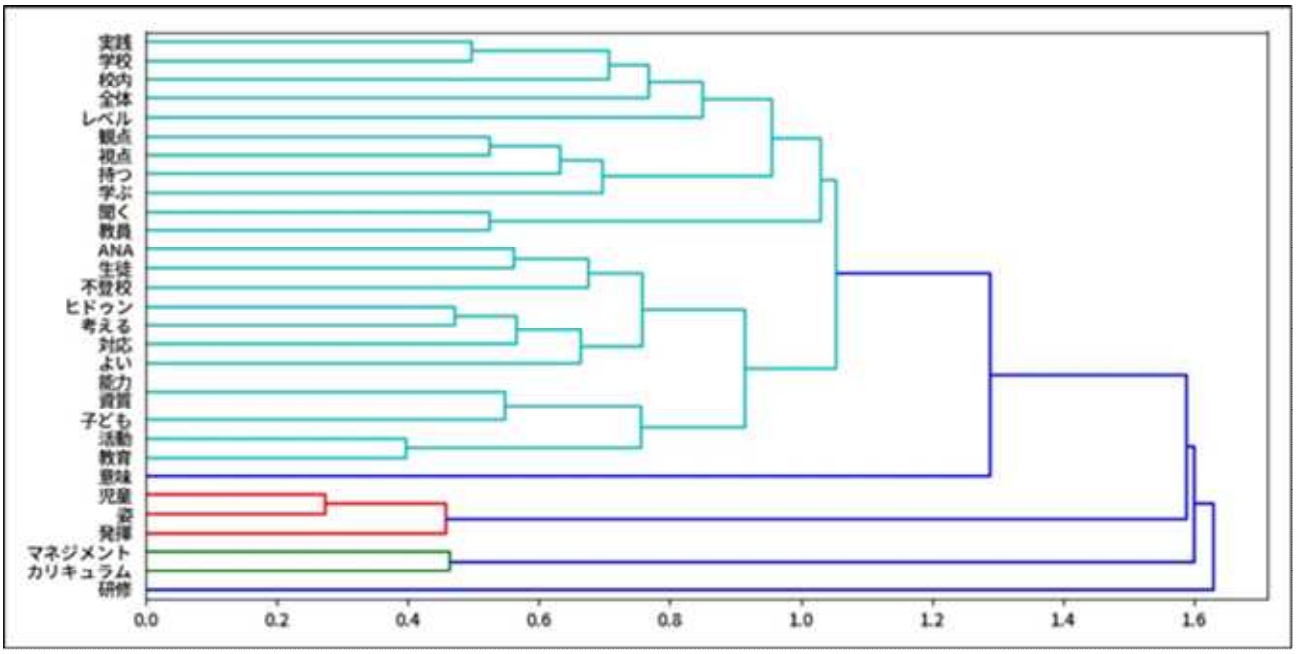
また、データやグラフの掲載は略すが、教職大学院在籍の学部卒院生は、学びの関連性より「全てが学び」、「与えられたもの（内容）を、与えられるやり方（研修方法）で学ぶ」という意識が強く見られる。

それぞれの属性からなる受講生が、一堂に会して学び合う中で、お互い「win-win の関係」が成り立つのであろう。それぞれの学びの特性を捉えて、それを生かしながら研修を企画運営する必要性を再認識した。

教職大学院現職教員	単語	公募受講生現職教員
26	視点	74
64	教育	36
45	研修	55
53	学校	47
55	教員	45
71	先生	29
6	カリキュラム	94
74	学び	26
85	課題	15
57	子ども	43
73	大切	27
62	授業	38
7	発揮	93
23	生徒	77
82	思い	18
81	機会	19
100	多く	0
100	テーマ	0
32	資質	68
32	能力	68
37	実践	63
32	児童	68
22	マネジメント	78
22	対応	78
0	レベル	100
0	校内	100
100	である	0
66	様々	34
100	防災	0
63	立場	37

○教職大学院現職（上）・公募受講現職教員（次ページ）の「階層クラスタリング」





○教職大学院現職（上）・公募受講現職教員（下）の「語句頻度スコア」

名詞	スコア	出現頻度
教育	16.38	28
学校	3.18	23
研修	19.38	23
先生	1.87	19
教員	27.50	19
学び	18.62	15
課題	4.15	15
大切	2.78	14
子ども	3.54	14
授業	1.98	13

動詞	スコア	出現頻度
できる	2.60	53
学ぶ	11.59	25
思う	0.23	20
いただく	2.61	19
考える	0.92	19
いく	0.20	11
得る	1.20	10
求める	1.42	10
気づく	0.68	8
出会う	1.93	8

形容詞	スコア	出現頻度
よい	0.13	7
素晴らしい	0.33	5
深い	0.38	5
広い	0.33	3
新しい	0.05	3
幅広い	3.00	3
多い	0.03	3
つらい	0.21	2
強い	0.02	2
やすい	0.03	2

名詞	スコア	出現頻度
研修	5.10	11
視点	6.20	11
学校	0.40	8
カリキュラム	4.20	6
教員	3.77	6
教育	0.88	6
生徒	0.94	5
発揮	2.51	5
マネジメント	1.94	4
児童	1.94	4

動詞	スコア	出現頻度
できる	0.37	20
思う	0.06	10
考える	0.26	10
いく	0.14	9
学ぶ	0.53	5
いただく	0.19	5
聞く	0.06	5
持つ	0.05	4
感じる	0.05	3
目指す	0.06	2

形容詞	スコア	出現頻度
いい	0.01	3
よい	0.02	3
うまい	0.04	2
強い	0.02	2
良い	0.00	1
多い	0.00	1
正しい	0.03	1
薄い	0.05	1
厚い	0.22	1
かっこよい	0.04	1

(3)「研修リフレクションシート」のコメントから

受講者のレポートの一部を紹介し、「受講生としての学びの実感」を整理する。

（公募により受講した現職教員：高等学校）

「人を動かす大切さ」を学びました。「人が動く」＝「変わる」。つまり「変えよう」と思えば「人を動かす」ことが必要。だから「動かすためにはどうするか」を考える自分ができてきた気がしています。

まず、「ちゃぶ台」方式で意見交換をする、ケース会議をしたり、熟議をする、そしてそれらをまとめて発表し全体で共有するスタイルは、実は校内研修や県教委等主催の研修ではあまりなく、基本講義や講話が多いように感じます。「ちゃぶ台」方式だと自分の参加度が高く「自分ごと」にしやすいです。そういうスタイルに慣れてきたので、校内の「学びの変革」プロジェクトの推進会議（管理職や中堅教員と私）や各種会議においても、自分の意見を持ってそれを発言できているのだろうと思えます。管理職に意見を求められても、あまり発言しないで済ませる雰囲気は改善すべきとも思っていますし、この研修プログラムに参加する中で、会議を伝達会議ではなく熟議化すべきだという思いも強くなりました。そうすれば学校や学校改善も前に進むのではないか、みんな「変わらない」「変わらない」と言うけれど「私は変える方法（火をつける方法）を知っている」という気にもさせてくれる研修プログラムだと感じています。

現在、実際の校内活動、生徒と教員の実践活動として、教職志望生徒（将来、教育職や教育学部への進学を目指している者）を集め、「ちゃぶ台」方式で想いや悩みを共有させ、チームで学習や話し合い活動を行っています。校内の若手教員や中堅教員にも協力してもらい、「そもそもなぜ教員になったのか」、「今どのような仕事をしているか」等のインタビューをさせたり、ベテランの先生を会に呼んでアドバイスを貰ったり，学校や教育について若手教員の頃からの熱い思いを話して貰ったりしながら教職への思いを高めています。そうやって、「生徒の成長のために校内（外）の人を動かすことも大事だ」ということもこの研修プログラムから学んだことのように思っています。

卒業する生徒向けの「最後の学級通信」に載せた文章（一部）です。紹介させてください。

>>>「かえる」場所を持つこと。それは「自分の軸」になり人生の支えになるでしょう。

物理的に帰る場所は「家族」のもとかもしれません。もしくは、自分がこれから愛することになる土地かもしれません。そういう場所があることは幸せなことです。居心地がよく、ホッと安心でき、自分の存在を無条件で受け入れてくれる場所「my home」です。そういう場所とともに、自分にとって原点と呼べるような場所を持ってください。それは、夢の出発点であるこの高等学校かもしれませんし、進学先の大学かもしれません。もうすでに持っている人もいるかもしれません。今の自分の出発点であり、そこに戻ると初心を確認でき、想い新たに頑張ろうと思うことができる場所を見つけてください。

私にとってそれは、山口大学教育学部の「ちゃぶ台ルーム」です。私は教育学部生ではなかったのですが、大学院生の頃からその教育学部の研修会に参加しています。それから約10年たっていますが、ず〜っと変わらず学ばせてもらっています。「我が師」と呼べる人がおり、ライフワークのようなものです。日々教員として忙しくしている中で、原点に戻って「教育とは何か」、「何のための、誰のための教育か」、「今求められているものは何か」ということを感じ、考え、思いを共有できます。

また、志を同じくする学生と現職教員が集う場所です。ここには、多様な人との出会いがあり自分自身の幅を広げてくれます。学生だった頃、教員として駆け出しだった頃、そして現在では、私の中のこの研修会の位置付けや研修会の中で求められる私の役割は違いますが、私の

「かえる場所」であり、私の「教育の原点」に違いありません。心が折れそうな時も、迷子になりそうな時も、ここに戻って仲間と話し、学び合うとまた元に戻って、ぶれないで信じる道を歩むことができています。

私の場合はこういう研修会であり、そこに集う志を同じくする尊敬する師や仲間たちですが、団体や物理的な場所でなくとも、人生の指針となる人、生き方や在り方の手本を示してくれる書籍、探究的な問いのようなものでもいいと思います。しんどい時もうれしい時も、迷った時も順調に進んでいる時も、ふと立ち返ることができるようなそういう「かえる場所」を探してみてください。そういう「自分の軸」があれば、あなたの人生の支えになってくれるでしょう。>>>>

（公募により受講した現職教員：小学校）

研修内容の面で学んだこと、身についたと思うことを書きます。

例えば、萩市で開催された第２回研修会では、校内研修の充実についてのお話しを伺いました。講師の先生が研修主任の際に出されていた「教員通信」を見せていただいて、このような研修や人材育成に対する「熱い思い」が、学校づくりにはやっぱり欠かせないのだなと改めて感じました。またその「教員通信」の中で、実際に「こんなふうに授業を僕はやってみましたよ。」という例がたくさん示されており、実践や子どもの具体的な姿で語ることでより説得力も増す、と研修企画のあり方について大きな示唆を得たと感じています。

道徳教育を学ぶ機会であった第８回研修では、同じ学校に以前勤めておられた先生の実践事例発表をお聞きしました。また、香川大学の七條先生からもお話を伺いました。道徳が教科化されるということもあり、注目度は増していると思いますが、何が大切で、どのようなことを目指していけばよいのかを聞いていくと、ずっと変わらない不易で大切なものも明確に見えてきて、今後の道徳教育の在り方についての見通しが持てました。

勇往邁進

教育界を担う新進気鋭のリーダー候補等 51人 が集まって
ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course スタート!

基調講演 「山口県教育の現状、課題と教育施策」
山口県教育庁教育政策課教育企画班 班長 中﨑 由規 さん

ありがとうございました！（受講者の感想から）

講義演習 「信頼される人のリーダーシップとは」
ANAビジネスソリューション株式会社 講師 新開 千恵 さん

ありがとうございました！（受講者の感想から）

チームビルディングゲーム

このように、様々な研修の中で、教育全体や学校全体を見渡す視点と、明日の自分に生かせる目の前の視点の両方が研修の中で学べたことがとてもありがたかったです。

次に、研修プログラムの企画運営に面ですが、私自身、山口大学出身ではないため、はじめは知り合いもおらず少し心細かったのですが、自分たちの学校や子どもの実情について相談する場を設けて

いただいたり、ワークショップ型で関わり合いながら学べる機会をつくっていただいたりしたため、自然と様々な校種や年齢の方々と関係を深めることができたように思います。別の研修会でお会いしたときにも声をかけていただきパワーをもらいました。

また、大学の先生方や教職大学院にいらっしゃる現職教員の方々など、同じ教員でも様々な状況の方がおられたり、別の職業に就かれている方を講師として招いていただきお話を聞いたりする中で、これからの自分自身の在り方や進む道についても考えるきっかけとなりました。

大学生との関わり、初心を思い返すことができ、勉強熱心な姿にただただ感心するばかりでした。普段学校の中で生活するだけでは、関われる方も限られます。様々な刺激をいただく場となり参加してよかったと思っています。

最後に、今年度は学校行事等と日程が重なり、参加できなかった研修が何度かあったのですが、毎回出していただく「学級通信」を見て、研修内容が分かってありがたかったです。同時に、研修内容の充実さを知って「行きたかった～！」と悔しい気持ちが増してくるばかりでした。お忙しい中、研修メンバーを学級の子どもたちのように温かく励ましてくださるスタッフの方々の雰囲気がいつもありがたいです。

（教職大学院に在籍する現職教員：特別支援学校）

まず、研修内容の面から、①「見識を広げることができた」という実感があります。

「ちゃぶ台」に参加した際には、いつも多くのことを学ぶことができました。本県教育のめざす方向性や教育現場におけるチームづくり、研修・研究のあり方や不登校、集団不適応の子どもに対する支援のあり方等、幅広い教育的課題についてふれ考えることができました。講義では専門性の高い講師からの具体的な指導や提言をいただくことができたし、演習では現地で日々課題に取り組んでいらっしゃる様々な立場の方と協議させていただく機会を得ることで、本県の抱える課題について直接ふれることができたと考えています。この「現場感」については次の項目でも述べます。

では、その課題解決に向けて自身のスキルがどう高まったか、という部分で自信がもてないのは自分の大きな課題ではありますが、少なくとも講義や演習等で様々な立場の方からいただ

いた指導や指摘は私自身の財産であると考えているし、自分の発した意見の中で相手から「評価された」という実感があったことも数多くありました。こうした点について、私の教育的課題に対する見識は広がっているという実感を得ています。

同時に、学生たちとの協議・演習の機会では、むしろ私のほうが多くの刺激を得たという思いがあります。彼らは経験こそ少ないが、私にとって遠い昔の記憶を想起させるような「教職への熱い思い」をもっていると感じます。「負けてられないな」と考える同時に、彼らがもっと頑張れるような職場環境づくりに自分の役割を得たような思いがします。原籍校では、毎年多くの非常勤講師の若者が入れ替わるのが現状です。そうした若者に対し、我が校が大切にしてきたことを初めに伝えようとしてきたことを反省しました。彼らがどういう思いをもってここにいるのか、そのことを聞いてから話をしようと考えるようになりました。

次に、②「思いを深めることができた」があります。

私の研究テーマは「特別支援学校におけるコミュニティ・スクールのあり方」です。そうしたことから、私はこのテーマに通じる多くの学びを得ることができました。

例えば、防災・減災教育の回では、「地域支援とは」ということを深く考えることができたと感じています。命を救うためにある大切なこととともに、そうした危機を乗り越えようとしている方たちに対し安全な場所にいる我々が何をできるだろうか、というテーマについて自分たちなりに深く考え、学ぶことができました。支援の開始と継続、形式やそれにかかわる人の思い等の視点から「ともにある」とはどういうことか、と問う思いが私の心に残りました。そして、そのことは一方で私には差別や偏見に苦しむ障がい児・者やその保護者たちの顔を思い起こさせるものでもありました。「特殊教育から特別支援教育へ」、「援助から支援」へと移り変わる用語は、「その意味を正しく伴った変遷となっているのだろうか。」と。

私は「地域とともにある」学校づくりのめざす方向性が好きです。しかし、日々障がいを有する子どもや家族と接する中で、残念ながらそのことは簡単にもたらされるものではないことも実感しています。「ともにある」ための第一歩は何か、どうすれば始まったときの方向性を保っていけるのか。組織的な取組や効果の「見える化」の必要性を考えることができました。

次に、研修の企画・運営面でも学んだことが多くありました。

まず、③「事件（課題）は、現場で起きている！」ということです。地域の課題についてより理解するためには、その現場に行くのが最善の方策です。と、言葉にすれば当たり前のことのようですが、私はこの研修でそのことをまさに実感することができました。

例えば柳井市の教育課題の一つ、不登校児童生徒の増加ですが、数字やグラフで説明を受ければその事実は分かりますが「空気感」はやはり伝わりにくいです。私は、研修の前に柳井の町を学校経営コースの仲間たちと一緒に観光して歩きました。ごく短い時間ながら「白壁の町並み」や「金魚ちょうちん」、「醤油工場」等の特徴的なところを回りました。そのことで柳井の持つ素晴らしさの一端を知ることができました。その上で、午後の「不登校」に関する講義や演習に臨んだところ、私の頭は「人間関係に傷つき、前向きに行動できない子どもはあの柳井市民が誇りに思う町並みや伝統工芸品等をどうとらえているのだろうか」という思いで一杯になりました。

また、私が演習でご一緒した「児童相談所のケースワーカさんのことを知っているのか」といった具体的なイメージがもてたことを記憶しています。繊細な感情をもった子どもたちが自身の育った町に誇りをもてるような教育であるなら、あるいはすぐに学校へと足が向かなくても、どこか「好きな居場所」を見つけたり、「頼れる人」を探したりすることもできるのではないか。町並みやそこに働く地域の方の顔を思い浮かべながら考えることができたのは、この

研修機会をいただけたことや、現地のよさを一緒に探し歩いてくれた仲間の存在があってこそだということを考えました。

次に、④「みんなで学べば怖くない」があります。

上に述べた仲間の存在ですが、大学院入学以来自分の力のなさを常に感じている私にとっては、何よりもありがたいものになっています。そうした思いも含め、この「ちゃぶ台」システムの研修ではグループでの演習によさを感じることが多いです。自分の意見を広げ、深めるための素晴らしいシステムだと思います。

では、そのグループ分けにはどのような意図がこめられているのでしょうか。いつか先生方にお聞きしたいと思っていますが、まず自分の思いをまとめておきたいと思います。

私が参加した各回のグルーピングでは、学校経営コースの現職教員と公募により参加している力のある現職教員が居て、そこに学部卒の教職大学院生が加わる形が多いように思います。こうした形式の研修にまだ慣れない私や学部卒院生への配慮だと感じています。そして、加えて各回のテーマに沿った立場の方がバランスよく配置されており、心地よい「ホーム感」と刺激のある「アウエイ感」を内包していると私は思っています。こうした工夫がなされているとすると、私たちにとって大変ありがたい配慮であると同時に、我々一人一人が中心となって進めるという役割を期待されているともいえましょう。結果はともかく、一参加者で終わるのではなく、周囲の意見を広げ、取りまとめられるように、という思いだけはもって毎回の話し合いに臨むことはできたように思います。大変お世話になりました。

（教職大学院に在籍する学部卒院生：高校採用予定者）

学校や学校教育に関する現代的教育課題、特に今後の山口県教育においてその解決、克服が求められる教育課題について、現職教員、教育関係者や教職志望学生等と協働的な学びを行うことをとおして、より高度な実践的指導力を身につけるとともに、これからの教員が身につけるべき資質能力について探求し獲得することができる研修プログラムだと感じています。

また、研修行事における指導助言体験やメンターとしての関わりをとおして、学校リーダーやミドルリーダーとしての力量を高め、職能発達課題の克服につなぐことをも期待して、このプログラム（講義）に参加しています。

「ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course」は、教職大学院のメンバーだけでなく、県内・県外の現職の先生方と交流し、多くを学ぶことができるため、毎回この講義を楽しみしています。教育界に留まらず、様々な分野の講師の方のお話が聞けるとあって、教員としてまた一人の人間としての視野も広がり、多くを吸収することができています。

これまでに、多くの方から様々な分野の講演を聞くことができました。この講義を通して学んだことは、①教育者としての心構えと②教育の外の世界とつながりを持つ重要性です。教員の講演者や参加されている先生方は、いつも子どものことを考え、子どものために何かできることがないか、足を運び実行に移していらっしゃいます。ただ、子どもを思うだけでなく実際に実行することが大きな力になることを感じることができました。講演や研修に行き、誰かの考えを聞くことや、どう授業に生かせるか考えやってみることであれば、今の私にもできるのでやってみたいと思います。教育者として大切なことは、実現する力より、まず実行しようとする心構えであると学ぶことができました。

本研修プログラムでは、教育関係ではない方々の講演も聞くことができます。学校実習や大学の講義で考えるとき、いつも教育の枠組みの中で考えていたが、課題のヒントは枠の外にもあると感じます。私は教育学部卒生ではないこともあり、教育学に詳しくないため、そこばか

りを模索してしまっていたが、教育学部卒生ではないからこそ見える視点もあるということに気づくことができました。視野を広く持った上で、客観的に教育をみる重要性を学び、私に合った学び方を見付けることもできました。

(4)県内巡回型公開講座としての評価

本プログラムでは計4回を「内巡回型公開講座」として実施し大変好評を得ている。4市（萩・美祢・柳井・山口市）からの参加者にも同様に「自己評価シート」による評価を実施するとともに、終了後はメールにより意見収集等をしている。参加者と市教育委員会担当者のコメント（一部）を紹介する。

（研修会に参加した市内中学校教員）

開催される自治体、市町の現状や教育課題をふまえた巡回型の研修会と聞いて、少々驚いていました。確かに、山口県と言っても、各地域の実情や課題は違うし、学校数や大きさも違うし、人口や産業の様子も違うので、そういったオンデマンドの研修会というのも有りだなあと思いながら参加しました。

今回、取り上げられたように、学校でも不登校や不適応症状を見せる、抱える生徒はたくさんいます。学校でも一生懸命に対応しているのですが、正直に難しいと思います。

しかし、今回の研修会は、SCさんやSSWさんや市役所の方々もたくさんいらっしゃって、「学校だけではないんだ！」という気もして、何か嬉しい研修会でした。

教職大学院の授業としても取り扱われているというお話しを伺って、そういった「学び直しや捉え直し」の時期も教員には必要なんだろうとも思いましたし、県内を巡回しながら、広めようとされている所に大いに感動がありました。ぜひまた、柳井市に来て貰えるといいなあと思います。ありがとうございました。

（開催市教育委員会学校教育課長のコメント）

研修会、大変お世話になりありがとうございました。あいにくの天気で、会場が手狭で、周囲が騒々しくて済みませんでした。

しかし、まだまだ参加者が少なくて勿体ないと思いました。もう少し市内の先生方に広報周知を徹底すれば良かったと思います。次回はもう少し参加者があるように広報します。

教職大学院ができて２年ですが、県内に良い風を吹かせて貰っていると思います。今後が楽しみでもありますね。ぜひ今後もおいで下さい。楽しみにしております。ありがとうございました。

Ⅳ　連携による研修プログラム開発をとおして

1　プログラムの開発（企画、実施、評価）にあたっての思い（工夫・留意点）

本プログラムは、山口県の学校や地域が抱える教育課題の解決に向けて理論的・実践的なアプローチを加え、学校等における指導的役割を担える人材を養成する本学（教職大学院）と、学校、市町教育委員会や地域等と一体となって山口県教育を担う人材育成を進める山口県教育委員会とをつなぐ「架け橋プログラム」として開発してきた。

そして、本プログラムは、本学（教職大学院）が実施する自主的・自発的ミドルリーダー養成プログラムの受講生や教職大学院現職教員院生の課題解決力、組織的協働力、人間性等の育成を図るため、教職大学院「地域科目」と「ちゃぶ台ミドルリーダー養成プログラム」を融合・相乗させた教職大学院カリキュラム・教員研修プログラムの開発を目指してきた。

よって、以下について配意しプログラムを試行（企画・運営・評価等）してきたことについて理解を得たいと考えている。

(1) スクール・ミドルリーダー養成の実効性を上げる研修プログラムの開発
(2) 現代的課題、将来的現出課題等をふまえた研修カリキュラムの開発
(3) 自主的・自発的研修と教職大学院カリキュラムとの連動
(4) 地域課題、県課題へのアプローチをとおした院生の力量形成と大学院教育の質量的改善
(5) 教職大学院カリキュラムにおける地域科目の意義、実施運営の方途等に関する実践研究の前進
(6) 県内巡回型による教職大学院の地域貢献・教員研修機能の拡充と地域教員研修の活性化
(7) 県・市町教育委員会主催教員研修等と相乗する研修プログラムの具体研究
(8) 自主的、主体的に自らを高める研修集団の形成と「ピア・サポート」の効果的導入

2　プログラム開発の普及にあたっての思い

本プログラムでは、山口県内に見られる教育課題の解明、キャリア各期における教職職能開発、管理職、専門職やミドルリーダー養成に必要なカリキュラムの構想、巡回型講座開催による地域の教職員研修の活性化等に関する提案、試行的取組を行っている。

その成果や課題を、県内に留まらず、広く全国に発信することにより、各地の大学（教職大学院）と教育委員会の連携・協働による教職大学院のカリキュラム開発、リーダー養成に資する課題解決力向上プログラムの拡充が一層進むことを強く願うものである。それもまた、本学や本学教職大学院としての地域貢献と認識している。

本年 6 月 24 日、福井大学で開かれた「実践し省察するコミュニティ　実践研究福井ラウンドテーブル 2017（サマーセッション）」では、本プログラムに提案・紹介をとおして、本学（教職大学院）と山口県教育委員会（やまぐち総合教育支援センター）の連携・協働のあり方、プログラム実施による成果と展望等を全国各地へ発信してきた。「国立大学教育実践研究関連センター協議会」、「全国教育系大学交流人事教員研究交流集会」、「日本教育大学協会研究集会（ポスターセッション）」や各種学会等においてもプログラムの実践報告の形で発信してきたところである。

また、本プログラムの実践成果をベースに、他大学や教育委員会で新たな動きを創出してほしいという願いから、本「報告書」の提供という形で、全国各地の教員養成系大学（大学院・学部）や都道府県・山口県内市町教育委員会に提供することとする。

加えて、本プログラムの開発の中で深めてきたミドルリーダーに向かう若年教員の実態や研修ニーズ等について、本学ウェブサイトや山口県教育委員会ウェブサイトで発信し、「山

口県教員養成等検討協議会」や「学部・山口県・山口市教委人材育成会議」等で報告することをとおして、各地への伝播、新たな研修指導者の発掘と共有、大学と教育委員会とが連携・協働したミドルリーダー研修の方法や内容等について積極的に提案していきたいと考えている。

各地の教員研修や教職大学院・学部と教育委員会との連携・協働が一層活性化することを大いに期待したい。

3　他の大学や教育委員会等に参考にしてもらいたいこと

本プログラムの開発は、教職大学院やミドルリーダー養成研修への期待に応え、今後の人材育成、地域と一体となった教育活動等に資する教職大学院カリキュラム、スクール・ミドルリーダー養成プログラムのあり方を具体的に提案するものである。

また、「巡回型公開講座」として県内各地を巡回し、各地域の教職員や教育関係者に広く開放することにより、地域の教職員研修を活性化させ、大学と市町教育委員会等との新たな連携・協働のスタイルを提案するものである。

加えて、全国的喫緊課題で言えるスクール・ミドルリーダーの養成、教員の年齢階層バランスや結びつきの弱化から機能回復が求められる教職員集団や研修仲間づくりのあり方についても提案するものであり、それらの参考となる実践報告となればと考えている。

よって、本プログラム開発の工夫・留意点に加え、プログラム（研修行事）の実際（企画、準備、運営、処理、評価の考え方、ねらい、ポイントや留意点、研修内容、方法、場所、指導者等の実際等）について、全国各地の教育委員会や教職大学院の参考になれば幸甚である。

Ⅴ　その他

［キーワード］　教職大学院、カリキュラム開発、地域科目、ミドルリーダー養成、協働型教職研修、機関連携

［人数規模］　Ｄ．５１名以上　（登録受講者数 41 人、研修行事延べ参加者数 386 人 大学教員・関係者等を含む総研修行事参加者数 508 人）

［研修日数（回数）］Ｃ．研修会行事に限定の場合は１０日
ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course 10 回
ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course 単独研修 6 回　＋　ちゃぶ台次世代コーホート 乗り入れ研修 4 回

［研究分担者等］　研究代表：丹 信介　（山口大学教育学研究科　研究科長　教授）
研究担当：霜川正幸　（　同　教職実践高度化専攻　教授：主務者）
研究分担：和泉研二　（　同　副研究科長　教授）
佐々木司　（　同　教職実践高度化専攻　専攻長　教授）
鷹岡　亮　（　同　教授）
静屋　智　（　同　教授）
前原隆志　（　同　教授）
松岡敬興　（　同　准教授）
藤上真弓　（　同　講師）
村上清文　（山口大学教育学部　教授）
中田　充　（　同　教授）
長友義彦　（　同　教授）
生嶌亜樹子　（　同　准教授）
佐々廣子　（山口大学教職センター　アドバイザー）
浦田敏明　（　同　アドバイザー）
長砂志保　（山口大学医学部　係長）
久保田尚子　（山口大学教育学部　事務補佐員）

【問い合わせ先］　国立大学法人山口大学
大学院教育学研究科教職実践高度化専攻　教授　　霜　川　正　幸
〒753-8513　　山口県山口市大字吉田 1677-1
TEL&FAX：083-933-5458　E-mail：m-shimo@yamaguchi-u.ac.jp

山口県教育庁教職員課　主査　　杉　原　宏　之
〒753-8513　　山口県山口市滝町 1-1-1
TEL&FAX：083-933-4550　E-mail：a50200@pref.yamaguchi.lg.jp